『言語情報学研究報告』No.4（2004）

フランス語[1]

中田俊介
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

1. フランス語の使用地域と人口

フランス語話者の総人口約 9,000 万人のうち，およそ 7,000 万人がフランス語を母語とする人々である。残りの約 2,000 万人は，公用，商用など，より限られた場面において第二言語[2]としてフランス語を用いている。これに外国語教育などにおいてフランス語が使用されている英国，ドイツ，米国といった国々（ここに日本も含まれる）での「外国語としてのフランス語」話者を加えた人口は，およそ 1 億 2,000 万人と推定され，日本語の話者人口に近い規模となる。

フランス語を母語とする地域		フランス語を第二言語として用いる地域	
フランス	5,800 万人	アフリカ諸国	インド洋の島々
カナダ・ケベック州	600 万人	カナダ英語圏	ポリネシアの島々
ベルギー・ワロン地方	500 万人	ベルギーフラマン語圏	オセアニアの島々
スイス・ロマンド地方	160 万人	スイス他地域	東南・南アジア一部
イタリア・アオスタ渓谷	15 万人	アンチル諸島	米国の一部
モナコ	2 万人	中東の一部	南米の一部
合計　約 7,000 万人		合計　約 2,000 万人	

表 1：フランス語を母語あるいは第二言語とする世界諸地域と話者人口（CUQ 1991）

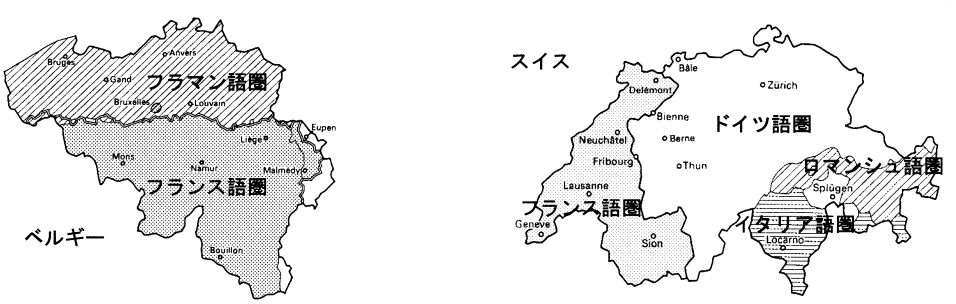


図 1・2：ベルギー・スイスの地域別使用言語（PICOCHE & MARCHELLO-NIZIA 1994）

[1]監修者　川口裕司東京外国語大学教授。本稿は，東京外国語大学 21 世紀 COE2003 年度第 21 回定例研究会，2004 年 3 月 16 日(火)における報告を基にして執筆された。
[2]ここで第二言語とは，複数の言語が用いられる国や地域共同体の内部で，法的・社会的に特権的な地位を得て用いられている母語以外の言語を指す（CUQ 1991）。

参考文献

CUQ, J.-P. (1991) : *Le français langue seconde*, Paris, Hachette.

PICOCHE, J. & MARCHELLO-NIZIA, Chr. (1994) : *Histoire de la langue française*, Paris, Nathan.

2. フランス語の規範・方言の概略

2.1 フランス語の規範的発音

前世紀 100 年の間にも，規範的とされるフランス語の発音は漸次的な変化を見せている。およそ第二次世界大戦頃を境として，世紀前半には「パリの教養あるフランス語」が規範とされていた。後の半世紀には，交通・通信手段の飛躍的な発展に伴って，都市部を中心に発音の平均化が進み，現在ではその結果としての「標準フランス語」が規範として意識されるに至っている。

2.1.1 パリの教養あるフランス語

1914 年の著書『フランス語発音要論 Traité pratique de prononciation française』の中で，Maurice GRAMMONT は「パリの由緒あるブルジョアジーが構成する上流社会」の発音こそがフランス語の規範であると述べている。同じく当時を代表する音声学者 Pierre FOUCHÉ は，フランシアン方言（パリを中心とするイル・ド・フランス地方の方言）を臣民の義務的言語とする 1523 年の勅令にさかのぼり，パリの教養あるフランス語を規範とする根拠をその歴史的正統性に帰している。

2.1.2 標準フランス語

André MARTINET の『現代フランス語の発音 La prononciation du français contemporain』(1945, 1ere éd.) は，音声的実現のみならず音韻体系においても地域的・社会的多様性があらわれるさまを記述し，「パリの教養あるフランス語」がそうした数多くのフランス語の一変種にすぎないこと，また，規範とされながら話者がきわめて限られたものであることを明らかにした。パリのフランス語の発音に関する調査は，その後も MARTINET の門下生たちによって継承された。1957 年に Ruth REICHSTEIN がパリの中高生を対象とした調査を行い，1962-63 年に Guiti DEYHIME がパリ大学都市などの学生を対象とする大規模な音韻調査を行なった。1973 年には膨大な録音調査を基にした発音辞典，『実際的慣用におけるフランス語発音辞典 Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel』が刊行されたが，これは MARTINET に始まる一連の社会言語学的な音韻調査の一つの到達点と捉えることができる。さらに Henriette WALTER は，パリの人々の語彙において観察される音韻体系の揺れを分析した。この研究は後の動的共時態の研究の先駆けになるとともに，同一の言語共同体に属する話者の間においても，複数の音韻体系が存在し，音韻の現れ方は語彙によって異なっていることがわかった。

MARTINET を中心とするこの一連の音韻調査によって，現在パリのみならず各地方でその存在が確かめられている「標準フランス語」は，パリの言語規範が単に地方に拡大することで生まれたものではないということが明らかとなった。それはラジオやテレビの普及，あるいは人口移動によってパリのフランス語が地方へ，逆に地方のフランス語がパリへと流入し，相互に干渉し合いながら，

平均化していく中で生み出された標準語である。

参考文献

BORRELL,A.& BILLIÈRES, M (1989) : L'évolution de la norme phonétique en français contemporain, *La Linguistique* 25/2 pp.45-62.

GRAMMONT, M. (1914) : *Traité pratique de prononciation française*, Genève, Delagrave.

MARTINET,A. (1971, 2me éd.) :*La prononciation du français contemporain*, Genève, Librairie Droz.

MARTINET,A.&WALTER,H. (1973) : *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel*, France Expansion.

WALTER, H. (1976) : *La dynamique des phonèmes dans le lexique français contemporain,* France Expansion.

2.2 フランス語の方言

フランス語は，話ことばのラテン語が先住民族のケルト人や，後に侵入してきたゲルマン人の影響を受けながら，独自の進化をとげつつ形成されたと考えられる。ただし，ケルト語がフランス語の形成にどのように関係していたかは明らかではない。南フランスでは早くからローマ文化が受容され，話ことばのラテン語は書き言葉のラテン語に比較的近い形で保持された。これに対して北フランスでは，ゲルマン語などの影響によって話しことばのラテン語は独自の進化を遂げた。こうして少なくとも6－7世紀には，フランスは言語的に大きく南北に二分されたようである。

これら二つの地域はその後も独立して進化を続け，両者の溝はますます深まり，中世には北部のフランス語はオイル語，南部はオック語と呼ばれ，二つの異なる言語として意識化された。また19 世紀になると，イタリアの言語学者によって，オイル語とオック語の両方と言語特徴を共有する第 3 の言語，フランコプロヴァンス語の存在が提唱された。これらの 3 つの語圏はさらに，共通の特徴を持ついくつかの方言地域に分けられる(図 3 参照)。現在のフランスでは，上述の標準フランス語の普及により，一部の地域を除いて方言は衰退の一途にある。とりわけフランス北部では古い方言形は大部分の地域で失われたと言われる。

現在フランス国外で母語もしくは第二言語として話されているフランス語も，併用される他の言語の影響(例えばカナダでは英語，アフリカではアラビア語やベルベル語など)や言語的孤立(米国ルイジアナ州など)によってそれぞれ固有の特徴を持つに至り，現在も変化を続けている。

地域別言語地図

図 3：オック，オイル，フランコプロヴァンス各語圏の方言分布（PICOCHE & MARCHELLO-NIZIA 1994）

参考文献

CHAURAND, J. (sous la direction de) (1999) : *Nouvelle histoire de la langue française,* Seuil.

CUQ, J.-P. (1991) : *Le français langue seconde*, Paris, Hachette.

PICOCHE, J. & MARCHELLO-NIZIA, Chr. (1994): *Histoire de la langue française*, Paris, Nathan.
SIMONI-AUREMBOU,M.-R.(1998): Les atlas linguistiques de la France par régions, *Modèles linguistiques,* Tome XIX, fasc. 2, vol. 38, 1998, pp. 37-54.
川口裕司 (2000):「書かれ始めたフランス語—Global Latin vs Local French—」.『語学研究所論集』. 第 5 号. pp.1-23.

3. 文字と発音

フランス語の文字表記には以下の 26 文字と, その下に示す 7 つの綴り字記号が用いられる。綴り字記号には場合によって用途が異なるものがある。また一部に accent の名がついているが, 超分節的特徴としてのアクセント(6.1 参照)とは無関係である。

3.1 アルファベット

A	a	**[a]**	N	n	**[ɛn]**
B	b	**[be]**	O	o	**[o]**
C	c	**[se]**	P	p	**[pe]**
D	d	**[de]**	Q	q	**[ky]**
E	e	**[ə]**	R	r	**[ɛʁ]**
F	f	**[ɛf]**	S	s	**[ɛs]**
G	g	**[ʒe]**	T	t	**[te]**
H	h	**[aʃ]**	U	u	**[y]**
I	i	**[i]**	V	v	**[ve]**
J	j	**[ʒi]**	W	w	**[dubləve]**
K	k	**[ka]**	X	x	**[iks]**
L	l	**[ɛl]**	Y	y	**[igʁɛk]**
M	m	**[ɛm]**	Z	z	**[zed]**

3.2 綴り字記号

記号	名称	用途	例
´	accent aigu	e のみにつき, **[e]**を表す。	été 夏
`	accent grave	e につくと, **[ɛ]**を表す。 a と u につくと発音は変わらず, 同音意義語を区別する場合がある。	mère 母 là そこに (cf. la その) où どこ (cf. ou あるいは)
^	accent circonflexe	ê は**[ɛ]**, â は**[ɑ]**, ô は**[o]**を表す。他に同音意義を区別したり, かつて存在した文字の脱落を示す場合がある。	être ～である château 城 hôtel ホテル maître 主人(<maistre 古形) dû devoir の過去分詞(cf.du～の)

¨	tréma	独立して発音されることを示す。	aïe 痛い！ Noël クリスマス
ç	cédille	a, o, u, の前で c が[s] と読まれることを表す。	ça それ leçon 授業 reçu recevoir 過去分詞
’	apostrophe	先行する語で語末の a, e, i が脱落していることを示す。	l’amie (la +amie) その女友達 l’ami (le +ami) その男友達 s’il (si +il) もし彼が
-	trait d’union	語と語の結合関係を示す。	après-midi 午後 week-end 週末

3.3. 文字と発音

フランス語では，文字あるいは文字の組み合わせの読み方は各々1 通りだが，1 つの音に複数の綴り字が対応している。ここでは綴り字との関連において特に注意すべき発音を取り上げ，母音・子音体系の構造や隣接する音の影響で発音が変化する現象については，**5. 母音と子音**で詳述する。

3.3.1 注意すべき口母音

発音	綴り字	特徴	例
i	i, î, ï, y*	「イ」より口を横に強く引く。	ami 友人 île 島 ouïe 聴覚 style 文体
y	u, û	「ウ」より口を尖らせ舌を突き出す。	tu 君は sûr 自信のある
ə	e	「ア」にやや近いあいまいな「ウ」。	demi 半分の
e	é	「エ」より口の上下の開きが狭い。	été 夏
ɛ	ai, ei, è, ê	「エ」より口の上下の開きが広い。	mai 5 月 seize 16 très とても fête 祭
u	ou, où	「ウ」より口を尖らせる。	cou 首 où どこに
o	au, eau, ô	「オ」より口を尖らせる。	auto 自動車 eau 水 rôle 役割
ø	eu, œu	「ウ」より上唇の丸めを伴う。	deux 2 vœu 誓い
œ	eu, œu	**[ø]**より口の上下の開きが広い。	seul 唯一の sœur 姉妹
wa	oi	口を横に強く引いた「ワ」。	soir 夕方

* y は母音の間で ii と同様に読む。(例：voyage **[vwaja:ʒ]** 旅行 → voi + iage のように読む)

3.3.2 注意すべき鼻母音

発音	綴り字	特徴	例
ɑ̃	am, an, em, en	「アン」より縦に口を開き鼻に抜く。	jambe 足 enfant 子供 employer 使う
ɛ̃	im, ym, aim, ein in, yn, ain, eim	「アン」より横に口を開き鼻に抜く。	important 重要な symbole 象徴 faim 空腹な plein 一杯の intéressant 面白い syndicat 組合 pain パン Reims ランス(地名)

œ̃	um, un	上唇を丸めた「ウン」を鼻に抜く。	parfum 香水 un ひとつの
õ	on	口を尖らせ「オン」を鼻に抜く。	oncle おじ
wã	oim, oin	「ワン」を鼻に抜く。	coin かど

3.3.3 注意すべき半母音

発音	綴り字	特徴	例
j	i（+母音） （母音+）il, ill-	**[i]** を短く発音する。	piano ピアノ pied 足 soleil 太陽 fille 少女
ɥ	u（+母音）	**[y]**を短く発音する。	nuit 夜

3.3.4 注意すべき子音

語末の子音字の多くは読まれない。ただし c, r, f, l は語末でも読まれることが多い。

発音	綴り字	特徴	例
k^{j}*	c（+a）	「キャ」の音。	café コーヒー
g^{j}*	g（+a）	「ギャ」の音。	gare 駅
k	c（+o, ou, u） qu（2 文字で**[k]**）	「カ」行の音。	comment どのように couleur 色 cuisine 料理 qui 誰 quatre 4 quelqu'un だれか
g	g（+o, ou, u） gu（2 文字で**[g]**）	「ガ」行の音。	gomme 消しゴム goût 味 ambigu あいまいな guide 案内人 guerre 戦争 fatigue 疲労
s	ce, ci, -ss-	「サ」行の音。	ce その facile 簡単な possible 可能な
z	母音+s+母音	「ザ」行の音。	vase 花瓶
ʃ	ch	「シュ」の音。	chanson 歌
ʒ	g（+e, eu）, j	「シュ」の有声音。	genou ひざ voyageur 旅人
ɲ	gn	「ニュ」の音。	Allemagne ドイツ
ʁ	r	「ハ」でのどを強くこすり声を出す。	rose バラ

* **[k^{j}], [g^{j}]** の口蓋化はとくにパリの若い話し手の間で顕著である。

参考文献

川口裕司, フランソワ・ルーセル (2001) :『パリのフランス語入門』. 三省堂.
新倉俊一他 (1996) :『改訂版フランス語ハンドブック』. 白水社.

4. フランス語の音節

4.1 音節の特徴

音節は「アクセント」を担う単位である。「アクセント」の語は研究者によって様々な意味に用いら

れるが，ここでは DI CRISTO(1999)に従い，アクセントを「語や句，またはさらに上位の発話単位の構造化・組織化に関与する局所的な卓立 proéminence」の意に用いる。こうした卓立は，音の高さや長さ，強さなどの超分節的特徴となって現れるものである[3]。フランス語においては，アクセントは意味的なまとまりをなす音節群（リズムグループ）の末尾音節に実現される。それゆえリズムグループ末のアクセントに向かって，各音節の内部で調音器官の緊張は持続し，英語のようにアクセントを受けない音節がいちじるしく弱化することはない。

Europe [øʁɔp] ヨーロッパ(フランス語)　Europe [juərəp] ヨーロッパ(英語)

上の例で各語のアクセントは下線部にあるが，英語ではアクセントのない音節-ope [rəp]で o が弱化するのに対し，フランス語では無アクセント音節 eu- [ø]の音質は保たれる。

フランス語の音節は母音を核とし，前後に子音を伴なうことができる。母音で終わる音節を開音節，子音で終わるものを閉音節という（以下で V は母音を，C は子音を表している）。

開音節				閉音節			
音節構造	例			音節構造	例		
V	eau	[o]	水	VC	il	[il]	彼は
CCCV	trois	[tʁwa]	3	CCCVCC	strict	[stʁikt]	厳格な

4.1.1 フランス語の音節の構造

WIOLAND (1991) は約 87,000 の音節を含む音声資料から，フランス語に現れる音節のパターンとその統計的頻度を明らかにしている。母音で終わる開音節が 70%以上を占め，フランス語に「聞こえ」の高い音特徴を与えている。

音節構造	用例			頻度(%)	累積頻度(%)
CV	chat	[ʃa]	猫	55.5	55.5
CCV	clef	[kle]	鍵	14.0	69.5
CVC	port	[pɔʁ]	港	13.5	83.0
V	eau	[o]	水	10.0	93.0

しかしアクセントを担う音節においては，閉音節も開音節とほぼ同じ頻度で生起するとの結果も報告されている。したがって，比較的発音の容易な開音節に劣らず，閉音節の発音にも注意を払うことが必要である。

[3] したがってここでいうアクセントは，語の意味に影響するピッチの変動としての声調(tone)のように対立する要素の体系をなすものではなく，連辞的な対照の機能をもつものである。

CV	41%
CVC	36 5%
CCV	8.5%
CCVC	7%
CVCC	6%
CVCCC	1%
その他	0.5%

開音節合計 ≒ 49.5%　　閉音節合計 ≒ 50.5%

音節の構造(開音節・閉音節)や位置(語頭・語中・語末)は次章でみるように，その音節内で現れうる母音の種類や子音の強さなどを条件づける重要な要素となっている。

参考文献

ASTÉSANO, C. (2001) : *Rythme et accentuation en français*, Paris, L'Harmattan.

DI CRISTO, A.(1999) : Le cadre accentuel du français:essai de modélisation, *Langues, vol.2 n°3&4.*

LÉON, P. (1992) : *Phonétisme et prononciation du français*, Paris, Nathan.

WIOLAND, F. (1991) : *Prononcer les mots du français*, Paris, Hachette.

5. フランス語の母音と子音

5.1 フランス語の母音

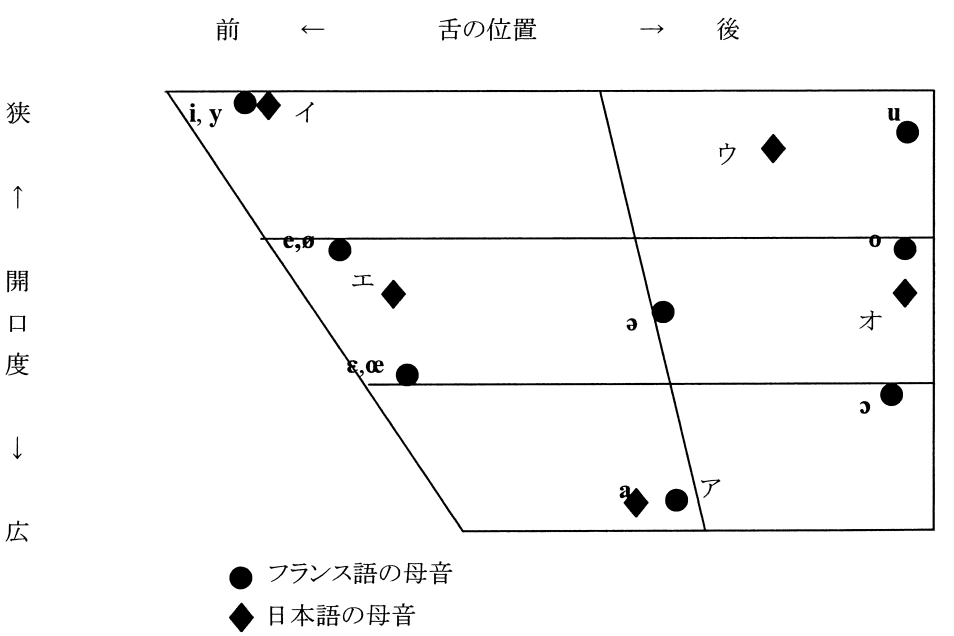
5.1.1 母音の音素体系

フランス語では，以下のように 15 の母音が音素として抽出される。15 個の中には，舌を前方にもちあげて発音される前舌母音と，唇の丸めを伴う円唇母音が多く含まれ，前舌性と円唇性がフランス語母音の大きな特徴となっている。

15 の母音音素は，すべてがあらゆる位置で互いに対立するわけではなく，後に見るように出現の条件が限られているものもある。

音素	音声的実現	例		
《前舌母音》				
/**i**/	[**i**]	[**si**]	si	もし
/**e**/	[**e**]	[**se**]	ses	彼ら/彼女らの(複)
/**ɛ**/	[**ɛ**]	[**sɛ**]	sait	知る(3 単現)
/**a**/	[**a**]	[**sa**]	sa	彼/彼女の(女)

《前舌・円唇》				
/y/	[y]	[sy]	su	知る(過去分詞)
/ø/	[ø]	[sø]	ceux	これら
/œ/	[œ]	[sœʁ]	sœur	姉妹
《中舌・円唇》				
/ə/	[ə]	[sə]	ce	この
《後舌母音》				
/u/	[u]	[su]	sous	～の下の
/o/	[o]	[so]	seau	バケツ
/ɔ/	[ɔ]	[sɔʁ]	sort	運命
《鼻母音》				
/œ̃/	[œ̃]	[œ̃]	un	1
/ɛ̃/	[ɛ̃]	[sɛ̃]	saint	聖なる
/ɔ̃/	[ɔ̃]	[sɔ̃]	son	音
/ɑ̃/	[ɑ̃]	[sɑ̃]	sans	～なしで



5.1.2 常に対立の認められる音素

/i/～/y/～/u/, /õ/～/ɑ̃/は，音節がアクセントを担うか否か，開音節か閉音節かに関わらず，すべての位置で対立を維持する。

[di] dix 10　　[dy] du ～の　　[du] doux 甘い
[dõ] don 贈与　　[dã] dent 歯

5.1.3 対立する場合が限られる音素

/e/～/ɛ/, /ø/～/œ/, /o/～/ɔ/はアクセントを担う音節において例外的に対立する場合を除き，以下のように狭い音と広い音が相補分布を示す。無アクセント位置では，両者の中間的な音色で実現される傾向がある。

開音節では狭い	[e] [se] ces これらの	[ø]* [ʒø] jeu ‘遊び	[o]* [bo] beau 美しい
閉音節では広い	[ɛ] [sɛt] sept 7	[œ] [ʒœn] jeune 若い	[ɔ] [bɔt] botte 長靴

* [ø] [o]は，語末の[z]の前に位置する場合，閉音節にも現れる。ふつう母音はこの場合，若干長く発音される。　[sɛʁvøːz] serveuse ウェイトレス　[ʁoːz] rose バラ

アクセントを受ける位置で/e/～/ɛ/, /ø/～/œ/, /o/～/ɔ/が音素として対立するのは，以下のような限られた場合である。

対立	位置	用例
/e/～/ɛ/	語末開音節	[e] gré 好み　épée 剣 [ɛ] grès 砂岩　épais 厚い

上の語は常に音韻対立が観察されるが，たとえば単純未来形と条件法現在の語尾 –rai と-rais は，必ずしもそうした対立が観察されない。また定冠詞 les も[e]で発音される傾向が顕著であるが，lait「牛乳」と対立するかどうかは話者による。

/ø/～/œ/の対立は語彙が限られるうえ，その使用頻度も低く，消滅傾向にある。

対立	位置	用例
/ø/～/œ/	語末閉音節	[ø] jeûne 断食　veule 無気力な [œ] jeune 若い　veulent 欲する(3 人称複数現在)

対立	位置	用例
/o/～/ɔ/	語末閉音節	[o] saule 柳　côte 海岸 [ɔ] sol 地面　cotte 作業ズボン

この対立は語末の子音が-r, -z のときは中和する。porc「豚」では母音は広くなり，cellulose「セルロース」では狭くなる。この対立は一般に母音の音色の違いとして実現されるが，狭い[o]は若干長く発音される傾向にある。

5.1.4 音韻対立の消滅

母音/**a**/～/**ɑ**/，鼻母音/**œ̃**/～/**ɛ̃**/の対立は，一部の地域では後者が前者に取って代わる形で消滅する傾向にある。

[pat]	patte（動物の）脚	**[pɑt]**	pâte パン生地
[bʁœ̃]	brun 褐色	**[bʁɛ̃]**	brin 若枝

この2つの音韻対立に関しては，先行研究の蓄積があり，かなり詳しいことが分かっている。

まず母音/**a**/～/**ɑ**/の対立は20世紀初頭では安定していたことが知られている。とりわけパリのフランス語では，女優アルレッティの発音に代表されるように，/**a**/は対立を誇張するかのごとく，広い母音**[æ]**で実現された。この対立が曖昧になりつつあることは，既に1914年にGRAMMONTが，1928年にPERNOTが報告している。1941年からMARTINETらによって行なわれた音韻調査でも，2つのaの対立は一貫して消失傾向にあり，70年代には既に対立を保持する話し手は半数以下であったことが知られている。今日では**[ɑ]**が聞かれるのは接尾辞-âtre, -oisなどに限定される。

鼻母音/**œ̃**/～/**ɛ̃**/の対立は，最初に民衆の間で消失したことが分かっているが，実際にそれが定着し始めたのは1950年以降のことである。この対立は1980年あたりに消失したと言われていたが，興味深いことに最近の調査では1970年以降に息を吹き返したとの報告もある。いずれにせよ今日でもemprunt「借用」，humble「控えめな」，un「一」などで，この**[œ̃]**が聞かれることは事実である。

参考文献

HANSEN A.B. (1998) : *Les voyelles nasales du français parisien moderne,* Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen.

WALTER, H. (1976) : *La dynamique des phonèmes dans le lexique français contemporain,* France Expansion.

川口裕司 (1983) :「現代フランス語の音韻体系(1)-(6)」，『雑誌ふらんす 4-9月』，白水社.

5.2 フランス語の子音

5.2.1 子音の音素体系

フランス語では18の子音[4]と3つの半母音が用いられ，無声子音はそのうち6つにすぎない。使用頻度では，雑音性の大きい無声子音p, t, kの頻度が低く，また有声で共鳴性の高いr, lが多く現れるとの統計的報告がある(WIOLAND,1991)。

[4] /**j**/を子音音素として認める立場に立てば，19子音である。

音素	音声的実現	用例		
《破裂音》				
/p/	[p]	[pu]	pou	しらみ
/b/	[b]	[bu]	boue	泥
/t/	[t]	[tu]	tout	すべて
/d/	[d]	[du]	doux	甘い
/k/	[k]	[ku]	cou	首
/g/	[g]	[gu]	goût	好み
《鼻音》				
/m/	[m]	[mu]	mou	柔らかい
/n/	[n]	[nu]	nous	私たち
/ɲ/	[ɲ]	[aɲo]	agneau	子羊
/ŋ/	[ŋ]	[paʁkiŋ]	parking	駐車場
《摩擦音》				
/f/	[f]	[fu]	fou	狂った
/s/	[s]	[su]	sous	～の下に
/ʃ/	[ʃ]	[ʃu]	chou	キャベツ
/v/	[v]	[vu]	vous	あなた
/z/	[z]	[zo]	zoo	動物園
/ʒ/	[ʒ]	[ʒu]	joue	頬
/r/	[ʁ]	[ʁu]	roue	車輪
《側面接近音》				
/l/	[l]	[lu]	loup	狼

音素	音声的実現 （母音の前で）	用例		
	《半母音》			
/i/	[j]	[sjɛ̃]	sien	彼のもの
/u/	[w]	[swɛ̃]	soin	世話
/y/	[ɥ]	[sɥɛ̃]	suint	スイント

	両唇	唇歯	歯 歯茎 後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	喉頭	声門
破裂音	**p b**		**t d**	**k g**				
鼻音	**m**		**n**	**ɲ**	**ŋ**			
ふるえ音								
はじき音								
摩擦音		**f v**	**s z ʃ ʒ**			**ʁ**		
側面摩擦音								
接近音				**j**				
側面接近音			**l**					

	有声両唇硬口蓋	有声両唇軟口蓋
接近音	**ɥ**	**w**

5.2.2 注意すべき音素

5.2.2.1 鼻音/ŋ/

鼻音/**ŋ**/は英語などの外国語からの借用語で，語末の位置にのみ現われる。

[ʁiŋ] ring (ボクシングの)リング

5.2.2.2. 硬口蓋音 /ɲ/

-gn-あるいは-ni-で綴られる単語は，しばしば，硬口蓋音**[ɲ]**あるいは二つの子音連続 **[n]**＋**[j]**の間で実現に揺れが観察される。

単語		**[ɲ]**	**[nj]**
éloignement	隔たり	優勢	
gagne-petit	稼ぎの少ない人	優勢	
agneau	子羊	**[ɲ]** と **[nj]** の間で揺れ	
peigner	(髪を)とかす	**[ɲ]** と **[nj]** の間で揺れ	
panier	パン籠		優勢
lainier	ウールの		優勢

5.2.2.3 半母音[j], [w], [ɥ]

接近音のうち，**[j]**, **[w]**, **[ɥ]**は半母音(または半子音)と呼ばれ，母音の前でそれぞれ**[i]**, **[u]**, **[y]**に代わるものとして現れる。

[nje] nier 否定する(不定形) **[nwe]** nouer 結ぶ(不定形) **[tɥe]** tuer 殺す(不定形)

[ni] nie 否定する(活用形) **[nu]** noue 結ぶ(活用形) **[ty]** tue 殺す(活用形)

母音の前の位置で，それらは各々対応する母音の変異として現れており，これらはフランス語の

子音体系の中で音素としての価値を持たないとも考えられるが，フランス語には硬口蓋音の鼻子音/**ɲ**/があり，かつこの子音は母音間で子音連続/**n**+**j**/と対立するため，子音/**j**/は音素として認定することが可能である。

5.2.3 同化

子音連続において，後続する子音が無声/有声の対立の組に属する場合，先行する子音は無声化あるいは有声化され，無声/有声の対立が中和する。フランス語では，このとき後続する子音の音声特徴が先行する子音に転移するため，逆行同化が起きる。たとえば次の例では，-p-と-d-が，前の-b-と-c-に有声の特徴を転移させる。

[apsɑ̃] absent 不在の　　**[anɛgdɔt]** anecdote 逸話

上の同化とは逆の現象も生じる。たとえば同一の音節において，先行する無声子音が後続する**[l]**や**[ʁ]**を無声化する。これを順行同化という。

[kl̥e] clé 鍵　　**[tʁ̥ɛ]** très とても

次のような語末の場合，-l と-m の無声化はさらに顕著である。

[kupl̥] couple カップル　　**[animism̥]** animisme アニミズム

ふつう観察される逆行同化ではなく，順行同化が/**l**/, /**ʁ**/, /**m**/などの子音において生じるのは，これらの子音が有声と無声の対立を持たず，そのため無声化しても，これらの子音の弁別に影響が出ないからであろう。他方，頻度は高くないが，これらの子音が有声性の特徴を先行する子音に転移させ，逆行同化を引き起こすこともある。

[kjazm] chiasme 交差配列法　**[izʁaelit]** israélite ユダヤ教の

参考文献

BRANDÃO DE CARVALHO J. et KAWAGUCHI, Y. (2002) : Linéarité et variation: le cas du “n mouillé” en français, *Flambeau*, 28, pp.1-20.

LEON, P. (1992) : *Phonétisme et prononciation du français*, Paris, Nathan.

WALTER, H. (1977) : *La phonologie du français*, P.U.F., Paris.

WIOLAND, F. (1991) : *Prononcer les mots du français : des sons et des rythmes*, Paris, Hachette.

6. フランス語のプロソディー　-アクセント・リズム・イントネーション-

6.1 アクセント

6.1.1 アクセントを表わす音声的要素

音の高さ，強さ，長さの変化のうち，フランス語アクセントの本質的な要素は長さの変化である。アクセントを担う単位は音節だが，アクセント位置の音節はアクセントを受けない音節の約 1.5 倍～2 倍の長さ(持続時間)になる。

6.1.2 アクセントの位置

アクセントは，句や文などの意味的なまとまりをなす音節群（リズムグループ）の末尾音節に置かれる。1つ1つの単語がアクセントを持つわけではない点に注意する必要がある。

la pe**tite**	la jo**lie**	la jolie pe**tite**	la jolie petite mai**son**
少女	きれいな女性	きれいな少女	美しい小さな家

ただし下の例が示すように意味的な区切りは一様に決定されるわけではなく，発話のスタイルや発話速度によって，アクセントの数は変化する。

Les pê**cheurs**／ évite**ront**／ la tem**pête**／ grâce aux pré**visions**／ de la mété**o**.

Les pê**cheurs**／ éviteront la tem**pête**／ grâce aux prévisions de la mété**o**.

漁師たちは天気予報のおかげで嵐を避けることができるだろう

しかし潜在的にアクセントを担うことのできる位置は決まっており，通常内容語 lexical word の末尾音節である。つまり変化するのは実現するアクセントの数であって，アクセントが現れうる潜在的な位置が変化するわけではない。

6.1.3 アクセントの機能

上述のようにアクセントは意味的なまとまりの境界を示し，聞き手に発話内容の理解を容易にさせる機能を持つ。一方，下の例のように特定の語の冒頭に置かれ，その意味を強調するアクセントが存在する。この強調アクセントは音節長と共に強さや高さの上昇によっても特徴づけられる。

C'est **su**per difficile！　やたら難しい！

語頭に現れるアクセントには，意味の強調だけでなく，後続する語末アクセントとともに語句の意味的統一性を表示する機能も認められる。

la *ma*jeure par*tie*　主要な部分　　*bru*mes mati*na*les　朝霧

このような場合，語頭アクセントは，より正確な言い方をするならば，リズムグループ冒頭を特徴づける句頭アクセントと呼ぶことができる。意味の強調を伴わない句頭アクセントは主に高さの上昇として現れ，音節の伸長はさほど見られない。

6.2 イントネーション

6.2.1 イントネーションとアクセント

「イントネーション」という語は一般に，発話の高さ（基本周波数）の変化を表わすために用いられる。一方アクセントは音節の伸長によって同定されつつも，高さの変化をもその本質的特徴として併せ持つ。とりわけ上に見た句頭アクセントは無アクセント音節に比べてさほど長さの差が認められず，もっぱら高さの変化によって特徴づけられる。「アクセント」という語が従来リズムグループの境界を表示する現象に用いられ，「イントネーション」が文単位の音調の変化を表わす場合に多く用いられてきたとすれば，イントネーションはアクセントの分布によって生まれる高さの変化であるということができる。

6.2.2 イントネーションの機能

イントネーションの主な機能のひとつにモダリティー表示機能がある。下の例では，統語的には表示されていないモダリティーをイントネーションが区別している。

Il va au cinéma ↓.　　Il va au cinéma ↑ ?

彼は映画館に行く(平叙文)　　彼は映画館に行きますか？(疑問文)

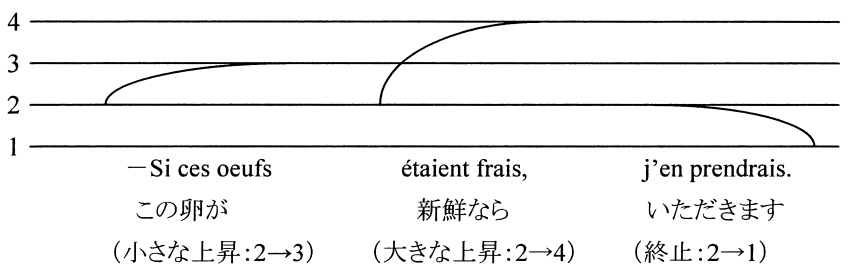
しかし，疑問詞の用いられる場合など文法的に疑問の意味が明らかな場合では，イントネーションの機能は補助的なものにとどまり，ニュアンスの違いを表わす。

Où vas-tu ↓ ?　／　Où vas-tu ↑? 君はどこに行く？

ここでは上昇のイントネーションを選択することで，話者は確認にとどまらない相手の意向に対する関心の高さ，あるいはていねいさを表現することができる。

6.2.3 意味単位としてのイントネーション

意味単位としてのイントネーションの様々な形を区別するために，高さの変化をいくつかの段階に分け，カーブの形状を用いてイントネーションを表示する方法が提案されている。



参考文献

DELATTRE, P.(1966) : Les dix intonations de base du français, in *French Review 40*, pp.1-14.

FÓNAGY, I. (1980) : L'accent français: accent probabilitaire in *L'accent en français contemporain Studia Phonetica Vol.15*, I.Fónagy & P.Léon (eds.), Paris/Toronto, Didier, pp.123-233.

LEON, P. (1992) : *Phonétisme et prononciation du français*, Paris, Nathan.

7. フランス語の音声の多様性

発音は地域によって多様であるが，ここでは代表的な音声特徴のみを挙げる。

7.1 子音

7.1.1 硬口蓋化

[k][g][t] などの調音の際に，前舌面が硬口蓋に向かって持ち上がることを硬口蓋化という。

[kaskɛt] → **[tʃastʃɛt]** casquette 制帽　　**[tjẽ]** → **[kjẽ]** tiens ほら

閉鎖音の強い硬口蓋化は，北部や西部，中央部に特徴的な発音である。強い硬口蓋化は田舎風あるいは民衆的とみなされる。

7.1.2 有声化

特にアルザス地方に顕著な現象で，**[p]**や**[k]**などの無声閉鎖音が有声化される。

[gɔnɛ] (je) connais（私は）知っている　**[ɛdʁ]** être ～である

7.1.3 破擦化

[t]や**[d]**の閉鎖音の後に摩擦音が伴なう現象を破擦化という。フランス国内の方言やカナダのフランス語などに見られる。

[maʁdi] → **[maʁdzi]** mardi 火曜日　**[paʁti]** → **[paʁtsi]** parti 出発した

[didje] → **[dzidzje]** Didier ディディエ（人名）

7.1.4 /r/ の地域的多様性

標準フランス語で口蓋垂の摩擦音**[ʁ]**として実現される/**r**/は，カナダのモントリオール州では，歯茎のはじき音**[ɾ]**（一回だけはじく）や歯茎のふるえ音**[r]**（いわゆる巻き舌）として発音される。

7.2 母音

7.2.1 長音・短音の対立

フランス東部（シャンパーニュ地方やブルゴーニュ地方）では，/**i**/～/**iː**/，/**y**/～/**yː**/，/**u**/～/**uː**/，/**e**/～/**eː**/などの長さによる対立が認められ，地域によってはすべての口母音で長短の対立が保持されている。同様の傾向はノルマンディー地方にも見られる。

[fe] fait 事実　**[feː]** fée 妖精

7.2.2 開音節における/ɔ/

標準フランス語では，/**ɔ**/が開音節に現れることはないが，フランス東部のフランシュ・コンテ地方では，しばしば**[ɔ]**が現れる。

[mɔ] mot 単語　**[otɔ]** auto 自動車

7.2.3 軟口蓋音の[ɑ]

ピカルディー地方や北部シャンパーニュ地方に特徴的な中舌ないしは後舌母音で，**[ɔ]**の音色に近づき，しばしば長さを伴う。

[tɑːʁdif] tardif 遅れた

7.2.4. 後舌化

ベルギーやフランス北部に特徴的な現象として，前舌円唇母音の**[y]**が後舌円唇母音として実現されることがある。

[lui]あるいは**[lwi]** lui 彼（彼女）に　**[uit]**あるいは**[wit]** huit 8

7.2.5 狭音化

リヨンやその周辺の地域では，語末の閉音節において，しばしば広い**[œ]**の代わりに，狭い**[ø]**が用いられる。

[føj] feuille 葉　**[vøv]** veuve 未亡人

7.2.6 南仏における無音の e

標準フランス語では，無音の e (e muet)は多くの場合に発音されないが，南仏ではしばしば発

音され，会話に歌っているような独特のリズムが付加される。以下の 7.3.2 も参照。

標準フランス語において/**o**/～/**ɔ**/は開・閉音節で相補分布しつつも，例外的に同じ位置（語末閉音節）で対立することがある（5.1.3 参照）が，南仏の方言にはそれら二つともを同じ[**ɔ**]で発音する地域がある。その結果/**o**/～/**ɔ**/による語の意味の区別はできなくなるが，そのかわりに一方（[**ɔ**]が au と綴られる方）の語末にあいまい母音/**ə**/が付加されることで両者が弁別される。

saule /**sɔːlə**/　柳　　sol /**sɔl**/　地面

7.2.7 不完全な鼻母音化

これも同じく南仏のフランス語に顕著な特徴である。鼻母音化が不完全であるため，ふつう後続の鼻子音が，最後に弱く短く発音される。

[**vɛ̃ⁿ**]　vingt 20

7.3 プロソディー

7.3.1 リズムグループの長さに見られる談話スタイルの多様性

アクセントはいくつかの音節をリズムグループにまとめるが，リズムグループの長さは話者の速度や談話スタイルの違いを反映することが統計的な調査から明らかにされている。FÓNAGY(1980)の調査資料によれば，リズムグループの平均音節数は会話で 3.31，講演（読み上げ）では 2.84，おとぎ話の朗読では 1.51 と持続時間の多様性が観察されている。

7.3.2 南仏に見られる緩やかなイントネーション

南仏では標準フランス語に比べて，緩やかで抑揚に富むイントネーションが聞かれる。これは標準フランス語では通常消失する語末の[**ə**]が発音されるため，そこにイントネーションの下降が起こっていることが一つの理由である。

参考文献

FÓNAGY, I. (1980) : L'accent français: accent probabilitaire in *L'accent en français contemporain* (Studia Phonetica), Vol.15, I.Fónagy & P.Léon (eds.), Paris/Toronto, Didier, pp.123-233.

LÉON, P. (1992) : *Phonétisme et Prononciations du français*, Paris, Nathan.

TUAILLON,G..(1988) : Le français régional: formes de rencontre", *Vingt-cinq communautés linguistiques de la France*, G. VERMES (éd.), L'Harmattan, 1988, 291-299, repris dans *A Reader in French Sociolinguistics*, Malcolm OFFORD (ed.), Multilingual Matters LTD, 1996, 95-102.

WALTER, H. (1977) : *La phonologie du français*, P.U.F., Paris.

WALTER, H. (1982) : *Enquête phonologique et variétés régionales du français*, P.U.F., Paris.